

## なりゆきと因縁

——長田紀之著『胎動する国境——英領ビルマの移民問題と都市統治——』

山川出版社、2016年11月——



長田紀之

経路依存性という言葉があるそうだ。おもに経済学の分野で用いられる言葉で、社会のさまざまな仕組みが、一度作られると慣性を帯びて、変化しにくくなる現象をさすという。これはつまり、なりゆきの結果として生まれたものが、その過程自体によってある種の因縁を抱え込んでしまうということではないか。そもそも歴史とはそういうものだという気がしないでもない。ここで紹介させていただく拙著も、そうした意味での歴史の本である。ミャンマー（ビルマ）という地域に近代国家が生まれてくるなりゆき、そこに絡みつく因縁を、19世紀後半から1930年ごろまでのヤンゴン（ラングーン）という限られた時空間に視点をすえて描き出そうと試みた。

ミャンマーはASEAN構成国の一つで、いま東南アジアと呼ばれる地域の北西の端に位置している。他方、西ではインド、バングラデシュと、北東では中国と長い陸の国境線で接している。歴史的に見れば、現在のミャンマーが位置する地域は、文化圏としての東南アジア世界、南アジア世界、東アジア世界がその周縁部において互いに重なりあうフロンティアであったと考えるほうがよい。融通無碍なフロンティア空間のうえに、近代になってからイギリスの植民地統治下で厳密な境界線で囲まれた領域国家が出現し、その中心点として港湾都市ヤンゴンが勃興した。まずは、この町のなりゆきを概観しながら本書の内容を紹介しよう。

## ●都市のなりゆき

19世紀後半、イギリスはミャンマー南部のエーヤーワディー・デルタを領有すると、そこを世界有数の米産地として開発した。その米の輸出港として、また新植民地の行政中心として、建設されたのが植民地都市ヤンゴンである。もともと人口希薄だったデルタに膨大な労働需要が生まれたため、周辺地域からの人口流入が起きた。デルタ農村はおもに北方から移住したビルマ人農民が切り開いたのに対して、インド亜大陸東部の諸港からベンガル湾をわたってきたインド人出

稼ぎ労働者たちはヤンゴンなどの都市部に集中した。20世紀初めのヤンゴンでは、20～40万人の人口の過半数をインド人が占め、後背地の多数派であったビルマ人は都市人口の3分の1程度にすぎなかった。しかも、インド人出稼ぎ労働者たちの移動性は高く、ヤンゴン港における毎年の人の出入りも数十万人規模だったので、都市人口の新陳代謝の程度は甚だしいものであった。

こうした状況下で移民の統制が問題化する。植民地あるいは帝国の経済発展という観点からは、安価な労働力である移民の流入に、なるべく制限をかけるべきではないと考えられた。ここで重要なのは、ミャンマーが英領インドを構成する一地方行政体（ビルマ州）として植民地化されたという事実である。19世紀後半以降、越境移動に対する統制が世界的に強まっていたが、インド亜大陸からビルマ州への「国内移動」には国際移動と同じ水準の統制を加えるのが難しいという論理が持ち出された。一方、地方行政体ビルマ州の統治の観点からは、無制限の移民流入は疫病や犯罪増加の可能性もともなっており、ある程度の統制が必要視された。ビルマ州政府のイギリス人行政官たちは、労働力供給量の維持という条件のもとで、ヤンゴンの移民を質的に管理する制度を作り上げていかねばならなかった。

本書は、ビルマ州政府による移民統制の過程を、治安維持、公衆衛生、都市計画という都市社会との接点となる3つの行政分野に着目して叙述した。結論を述べれば、1910年代から1920年代に、移民を都市社会への脅威とみなす認識にもとづいて、徐々に移民管理の諸制度が構築されてゆく。しかし、それらは都市住民の福祉の向上を目的としたものではなく、あくまでも統治性の向上を追求するためのものであった。依然として経済発展を基調とし、外来の資本や労働力の利用を重視する植民地主義の諸政策のもとで、定着的な傾向を持っていたビルマ人下層民が都市空間から疎外されていった。ヤンゴンでは、世界大恐慌をきっかけと

して、1930年にビルマ人とインド人とのあいだで大規模な人種暴動が起きたが、この暴動の背景には植民地状況下で都市社会に蓄積された矛盾があったと考えられる。

## ●国家のなりゆき

ヤンゴンの植民地経験は、ミャンマーの近代国家形成の過程と不可分に結びついている。移民統制強化の過程で、国際市場と後背地の双方に向けて開かれ、多様な要素から構成された植民地都市ヤンゴンは、次第にミャンマー近代国家の首都としてその閉じた枠組みのなかへと囲い込まれていった。本書の対象時期、ミャンマーは英領インドの一部だったので、ミャンマーとインドを隔てる国境は存在しなかった。しかし、ビルマ州政府は地方行政体としての制約のもと、都市問題へのいわば場当たりの対処として移民統制を実践してゆくことで、ヤンゴンに国境的な性格を帯びた境界を生み出したといえる。移民統制には、空間的に領域の内と外を区別し、また、人々の帰属を内部と外部に振り分ける論理が内在するからである。

もちろん、移民統制を国家形成と同一視することはできない。領域という観点から近代国家の形成過程をみれば、そこでは領域を縁取る境界の機能強化と領域内部における面的支配の強化とが車の両輪となって進められる。ビルマ州においても面的支配を強化する施策がとられたが、ヤンゴンに移民がもたらした過剰な流動性は、ビルマ州の面的支配を揺るがしうるものであった。そのため、ビルマ州を管轄する行政官たちは、領域の内と外を区別する制度や範疇を作り出し、境界機能を強化する必要に迫られた。本書は、ヤンゴンという一地点におけるこうした行政実践の積み重ねが、インドとは別個のミャンマー国家の領域を作り出していくうえで大きな推進力になったという見方を提示した（ビルマ州は1937年にインドから分離され、日本占領期を経た1948年に独立国家となる）。

また、本書では、植民地主義の行政実践が、都市のビルマ人の排他的ナショナリズムを助長し、民族間対立を深刻化させた可能性を論じた。独立により、イギリス人植民地行政官にとってかわったビルマ人ナショナリストたちは、ミャンマーの国民国家を土着諸民族の集合体として規定し、外来とみなされる人々をそこから排除する施策をとった。土着民族と外来民族の区

別は国家の基本的枠組みとして現在までミャンマーの社会を強く規定している。本書の議論はこうした事態の植民地的起源を示唆する。とはいえ、植民地都市における移民統制のなりゆきは、独立国家にいかなる因縁を残したのか、その具体的な検証は今後の課題とせざるをえない。

## ●人生のなりゆき

この特集の企画案には、「本をつくろうとした意図」に触れるようにという指示がある。後付けの「意図」をもっともらしく述べれば、現在のミャンマーが抱える問題への洞察をえるために、上記のような植民地期の都市社会変容や近代国家形成の過程を、そこにはらまれる矛盾も含めて民族誌的に記述すること、とでもなるだろうか。しかし、「あとがき」にも記したとおり、ヤンゴンとミャンマーのなりゆきを叙述した本書もまた、私自身の人生のなりゆきの結果として生まれてきた。

本書を生み出す種となった学部卒業論文に着手した20代のはじめから、足掛け15年の長いプロジェクトだった。最初から確固とした意図などなく、生来の行き当たりばったり気質も手伝って、ここにいたるまでには紆余曲折があった。人生自体も山あり谷あり。ミャンマー留学を当局に拒否されたこともあったし、恩師の急な訃報に接して茫然自失に陥ったこともあった。しかし、そうした人生の経路がまるごとで今の私をつくっており、私とミャンマー、私と周囲の人たちとのあいだに縁を結んできた。本書の出版は、とめどなく流れていく人生に一つの里程標を立てたようなものだ。おりしも出版の翌日、初めての子が私たち夫婦のもとに生まれてきてくれた。多くの人たちの縁に支えられながら、人生の新しいステージに足を踏み入れることになった。「波高しといえど、天気は晴朗である。今は漕ぎ出でん」の心境である。

（おさだ のりゆき／アジア経済研究所 動向分析研究グループ）